

## 2006 年度 小委員会活動成果報告

(2007 年 2 月 13 日作成)

小委員会名	音響数値解析小委員会		主 査 名：大鶴 徹 就任年月：2005 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学本委員会 (音環境運営委員会)		委員長名：加藤信介 主 査 名：平松友孝
設 置 期 間	2005 年 4 月 ~ 2009 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 建築周辺の音響数値解析に関し情報提供する Home Page の整備</li> <li>・ FDM, FEM, BEM 等の応用に関する基礎資料と相互比較データの収集</li> <li>・ Home Page の公開と一般からの意見聴取、修正</li> </ul>		
委員構成 (委員名(所属))	委員公募の有無：有		
	大鶴(大分大) 佐久間(東大) 坂本(東大) 河井(関西大) 堀之内(京大) 鮫島(九大) 大嶋(新潟大) 富来(松下電器) 横田(小林理研) 安田(東大) 大久保(小林理研) 池田(ヤマハ) 高橋(ヤマハ) 岡本(大分大)		
設置 WG (WG 名：目的)			
2006 年度予算	98,000 円	ホームページ公開の有無：有(暫定) 委員会 HP アドレス： <a href="http://gacoust.hwe.oita-u.ac.jp/AIJ-BPCA/comp_subcom.html">http://gacoust.hwe.oita-u.ac.jp/AIJ-BPCA/comp_subcom.html</a>	

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	
大会研究集会	
対外的意見表明・パ ブリックコメント等	1. 11 月末の日米音響学会などで継続的に研究成果を公表している。また、成果を日本建築学会環境系論文集に論文 2 編(第 605 号, 第 610 号)として投稿した。
目標の達成度 (当初の活動計画と得ら れた成果との関係)	1. 年 4 回の委員会開催を予定 3 月に委員会開催し達成予定。 2. 異なる手法での解析 B1-2F 並びに B1-3F で比較。結果を論文で公表済。 3. ベンチマーク問題の精選 類似するベンチマーク問題を整理。改案の提示。 4. ホームページの拡充 1.~3.の成果を順次、アップデートしている。
委員会活動の問題点 ・課題	1. 各地域で研究の基盤を固める活動を重視し、HP とメールを通じ協議等を実施する。その環境の充実が今後の課題である。 2. 成果は論文として着実に蓄積されつつあるが、HP の更なる充実と数値解析に関わる図書の刊行などを次ステップでの課題としている。

\* 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。

\* 環境本委員会傘下の小委員会においては、上記の活動成果報告書に加えて、以下の自己評価を記入すること。

\* 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

## 2006 年度 小委員会活動 自己評価

## (中間年度評価)

総合評価 (4段階評価)	B
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>2006 年度活動計画と現時点における活動成果を以下に整理する。</p> <p>&lt; 2006 年度活動計画 &gt;</p> <p>2005 年度の研究活動を継承し、成果を持ち寄り議論することで学術基盤を整備する。年 4 回の委員会開催を予定。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 各種解析手法と問題群の精選</li> <li>2) 各種解析手法の精度や効率に関する知見の蓄積</li> <li>3) WWW の整備・拡充</li> <li>4) 委員会活動をさらに広く公開するため、シンポジウム等を開催する</li> </ol> <p>&lt; 活動成果 &gt;</p> <p>年 4 回開催を予定している委員会は、2007 年 3 月で達成する予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 設定予定のものも含め、ベンチマーク問題について外部問題を中心に見直しを図った。類似する問題や、解析する意義の認められない問題は、削除または改案を提示した。さらに、新規ベンチマーク問題の設定を計画中で、3 月の委員会で議論する予定である。</li> <li>2) 各種手法で、2005 年度から継続的に各ベンチマーク問題に取り組んだ。</li> <li>3) これまで取り組んできた結果を整理し、外部問題を中心に、結果及び計算コストなどを HP にアップした。さらに、異なる手法間での比較結果を HP に掲載した。</li> <li>4) 今年度は国際会議 (WESPAC や日米音響学会) で国際的な広報活動を実施した。日米音響学会ではドイツや韓国などから HP を活用しており本活動を高く評価する旨の意見が寄せられた。</li> </ol> <p>以上、計画通り、2005 年度の研究活動を継承し、成果を持ち寄り議論した。しかし、昨年度まで受けていた科学研究費補助金の助成の終了に伴い、各地域から集まるための交通費の確保が困難で、昨年度ほど活発な協議の場を設けられなかった点が課題となった。従って、総合評価を B とする。</p>

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。